

しのぶ が おか
忍ヶ岡古墳

—もくじ—

- I 位置と環境..... 1
- II 古墳の墳丘..... 2
- III 内部施設..... 3
- IV 出土した副葬品..... 5

1974年4月

四條畷市教育委員会

はじめに

みどりの森として市民に親しまれている忍ヶ岡丘陵に位置する忍ヶ岡古墳は、原形をとどめる古墳時代前期の古墳としては近畿地方でも有数のものとされている。

市の歴史を語る上で省くことのできないこの古墳にかかわる報告書は、昭和10年京大梅原博士によるもののみであり、郷土愛好家の常に無念とするところであった。

昭和48年3月 日本考古学協会員、瀬川芳則氏の御好意により実施した古墳玄室内の測量調査をきっかけに、測量実測図に加え、若干の写真、説明、さらに府教委発行の遺跡実測図を集録、文化財シリーズ第2集として、ここに刊行することとなった。文化財保護行政推進への一助となればこの上ない幸せである。

なお、本冊子を刊行するにあたり御協力いただいた瀬川芳則氏、枚方市文化財研究調査会、歴史文化研究保存会の皆さんには深甚なる感謝の意を表します。

昭和49年4月

四條畷市教育委員会

教育長 奥田久雄

I 位置と環境

忍ケ岡古墳は、四條畷市の北部、国鉄忍ヶ丘駅から西方 300m の丘陵上に位置している。

四條畷高校より以西の黒土の沖積地である河内平野に突出している標高40m の丘陵で、この忍ケ岡丘陵は、行者山・交野ヶ原・香里台地などと同じく赤土の地層の洪積期丘陵であり、花崗岩でできている飯盛山・東・田原につづく生駒山系によりそうように立地している。

丘陵の北側には讚良川が流れ、広々とした河内平野をながめる景勝の地であるばかりでなく、南北朝時代の四條畷の合戦では、北軍高師直の軍勢の拠点になったり大阪夏の陣には、徳川秀忠が前進の陣地を定めるなど古くから軍事的にも重要な位置を占めていた。

忍ケ岡古墳周辺の歴史的環境としては、讚良川からは、チョッピングトール・翼状ナイフ・細石器などの旧石器の出土がしられている。

讚良川北岸の台地とそれにつづく河岸段丘には、縄文時代の岡山遺跡があり、縄文式土器の他に白鳳時代の古瓦が出土している。蓮華文のつく瓦の出土することから、この地の豪族であった新羅系の茨田勝を創建者とするらしい讚良寺(更荒寺)の存在が考えられるであろう。

四條畷市には、忍ケ岡古墳のほかに古墳時代の遺跡としては、中野に墓の堂古墳、清滝に双子塚古墳が現存するほか、滝にも黒石古墳があったといわれている。

いま丘陵上には、忍陵神社が鎮座しているが、この神社の社殿が、昭和9年9月に宝戸台風で倒壊し、翌年の復旧工事で、偶然、石室の一部が発見された。これが忍ケ岡古墳の発見である。

この発見により大阪府史蹟調査委員会では、一応の調査を実施し、その結果は梅

古墳時代とは

弥生時代に継続する時で、弥生時代にはじまった農耕が、共同体生産に発展していき、耕地の拡張などによって生産量をましていった。

この生産量の増加に平行して、階級分化がはっきりしていき、統治形態が出現してきて、国家的統一が進行していった時代である。

時期はだいたい3世紀末から6世紀中頃までである。

原末治博士によつて「日本古文化研究報告第4・近畿地方古墳墓の調査2・第二河内四條畷村忍ケ岡古墳」に報告されている。

なお、保存されている石室は、調査後に一部復原されたものである。



II 古墳の墳丘

北向きの前方後円墳であるが、前方部には大正寺が建ち、墓地になっているし、後円部は上部が削平され忍陵神社社殿があるために、現状の墳丘は原形とは異なっている。

梅原末治博士の前掲の報告書を参考にして、現状に若干の推測を加えながらこの古墳を考えてみよう。

古墳は南北に主軸をもち全長約90mの前方後円墳である。

後円部の直径は約45mで、現高は約6mであるが、社殿の築造のために削平されており、原形の高さは約2m程高かったと推定される。

後円部の南側から西側の一部の下辺がよく原形を残しており、それをもとに復原してみると截頭円錐状をなしていたと思われる。

前方後円墳

古墳は土を高くもって造られた古代の墓であるが、盛土の外形からいえば、方形・円墳・前方後円墳の三大別される。

前方後円墳は、方丘を前方部、円丘を後円部、方丘と円丘との接するところを「くびれ部」という。日本の古墳時代に特有の墳墓形式で、その形から茶臼山・車塚・双子塚と呼んでいいるところもある。

後円部と前方部のくびれ部にあたる所に巾3m程の凹地があり、この凹地は後円部の東側前部から前方部にのびている。

前方部は、この凹地が西に曲って小径の所で段をなしている部分までとも推定されているが、後円部の大きさや高さ等から、大正寺の鐘隣北端までと推定される。

前方部の巾は約20mで、高さは後円部の高さの半分位であろう。

現状では葺石の石材も円筒埴輪等もみつけられないが、円筒埴輪が石室の崩壊した部分から出土したと報告され、京都大学にも少量の円筒埴輪片が保管されている。

III 内部施設

石室は後円部のほぼ中央に位置しており、軸は古墳の主軸と平行で南北の方向にとっている。

復原された石室の大きさは、長さ6.3m、巾は南端では1mであるが、序々に狭



天井石

くなって北端では0.6mになる。高さは南端では0.73mであり、少し高くなつて序々に低くなつていき、北端では0.45mになる。

石室の構造は、安山岩質の板石を小口積みしていき、上部を同質の板石

円筒埴輪

埴輪は、古墳の墳丘上にたてられる赤褐色の素焼の土製品の総称である。

考古学上では、埴輪は円筒埴輪と形象埴輪とに2つに大別される。円筒埴輪には、簡単な円筒形をものと、円筒形の上部が広がっている朝顔形円筒埴輪がある。形象埴輪は、動物や人物、家などをかたどったものである。

を並架しているのは、多くの竪穴式石室に見られる構造である。

石室の底部は、粘土をかためて、0.3mの厚さにしきつめた粘土床をつくっている。粘土床は、石室の平面よりもひろくつく

くられている。中央部上面は、ちょうど蒲鉾を逆にしたような形で南北に凹んでいる。

この凹みには、考古学上、割竹形木棺と分類されるところの、直径1mもあるコウヤママキの大木を二つに割り、内を削り抜いてつくられた木棺が安置されていたものである。

底部の一部に、粘土床をつらぬいて大きな穴があるが、これは発見時に掘られたものである。この穴の観察から床は、封土と思われる土壤に粘土をひいた構造であることが明らかにされた。

石室の外周囲には、大小の河原石が置かれて地固めをしている。石室が崩れないようにされている。

石室の壁面の築成は、現在では復原され、断面を見ることができないが、前掲の報告書には、河原石は南側では0.6m以上、北側では0.9m以上置かれ、その下に粘土床よりも0.25m程深く基底に大きな割石を並べられていたと報告され、さらに次



小口づみ

竪穴式石室と横穴式石室

古墳の埋葬設備で石材を積んで作った室を石室といい、これには竪穴式石室と横穴式石室がある。

竪穴式石室は、はじめに四方の壁を造り、遺骸収容後に上部を閉塞する構造である。

横穴式石室は、はじめに三方の壁と天井部を造り、最後に一方の壁を出入口として閉塞する構造で、ふつう後退と玄室に分かれている。

のよう報告されている。

「即ち小口積の壁面の外側に同様の石材を加えて固めとしていることは従来とても既に知られている所であるが、こここの基底部では内壁から五尺余の部分にまで及びそれから上に至るに従い漸次減じて以て天井部に達し、而も縁辺に大石を重ねるところ、これに天井石を覆うて見ると、室を中心として大きな石築の「マックス」をなしたことが知られ、恰も細長い一種の積石塚とも見る可き外容となる。」

天井石は今回の調査の時には、5枚しか遺存していないが、発見時には6枚遺存していたということである。しかし石室を覆うにはたりず、盗掘の際に取り去られたものである。

石室内部の側壁の石に朱の付着が認められ、粘土床の凹みには、朱の薄層があつたと報告されていることから、遺体保存に朱を使用されたものであろうが、現在では認めるることはできない。

IV 出土した副葬品

石室内部には、既に述べたように盗掘されていたために、副葬品もあまり残存していなかったが、南半部より石製品や鉄製品が出土している。

発見者の語った副葬品の位置は、南壁の近くの床の縁に刀剣の破片、凹みの東南端に斧頭、西隅に鉢の破片、室の中央から南にかけて鉄片が偏在し、東南の壁の近くから紡錘車等の石製品があったとの事である。

石製品としては、石劍・紡錘車・鍬形石が認められる。

石劍 破片 1個分

紡錘車 破片共 6個分

鍬形石 破片 1括

〈紡錘車〉

糸をつむぐとき、回転によって糸に綫をかけるため、糸巻棒にさしてその回転をたすける円盤形あるいは截頭円錐形、算盤玉形の小器共、土製、石製、骨角製などがあり、大きさは径3~5cmで中心に貫通孔がある。

〈劍〉

腕輪をさす日本の古語。腕輪であればなんでも劍といえるわけであるが、考古学上の用語として

石劍の材質は碧玉製と呼ばれているもので、全形の約3分の2が遺存していた。内径5.7cmであるが、表面はひどく風化している。

紡錘車は、完形品4個、破片2個で、いずれも碧玉製である。完形品について見ると、径は5cm、高さ1cm内外で中央の孔は一方から穿ったものである。

鍔形石はすべて碧玉製である。破片が小さく復原は不可能であるが、2・3個分であると推定される。どれも直孤文系で飾っている。

鉄製品としては、剣身・太刀柄・鉾・斧頭・鎌・刀子・鎌・小札が認められる。

剣身	残欠	2口分
太刀柄	残欠	1括
鉾	残欠	2口分
斧頭	2種	3個
鎌	残欠	2口
	残欠	1個
刀子		1口
鎌	破片	若干
小札		数口

剣身は2口共に木鞘が身に密着して造っており、太刀の柄の片に萬葉の原形をとどめた柄の一部の外に、直孤文を刻出した装具片があって、しかもそれが木彫と覚しく精巧な彫法を示している。

斧頭には、扁平な古式の小型品と、両側を折り曲げて袋状にした大型品とがある。鎌には木柄が遺存していた。

小札はこはゼ形をしており、挂甲所用のものであることから甲の副幕が推察される。

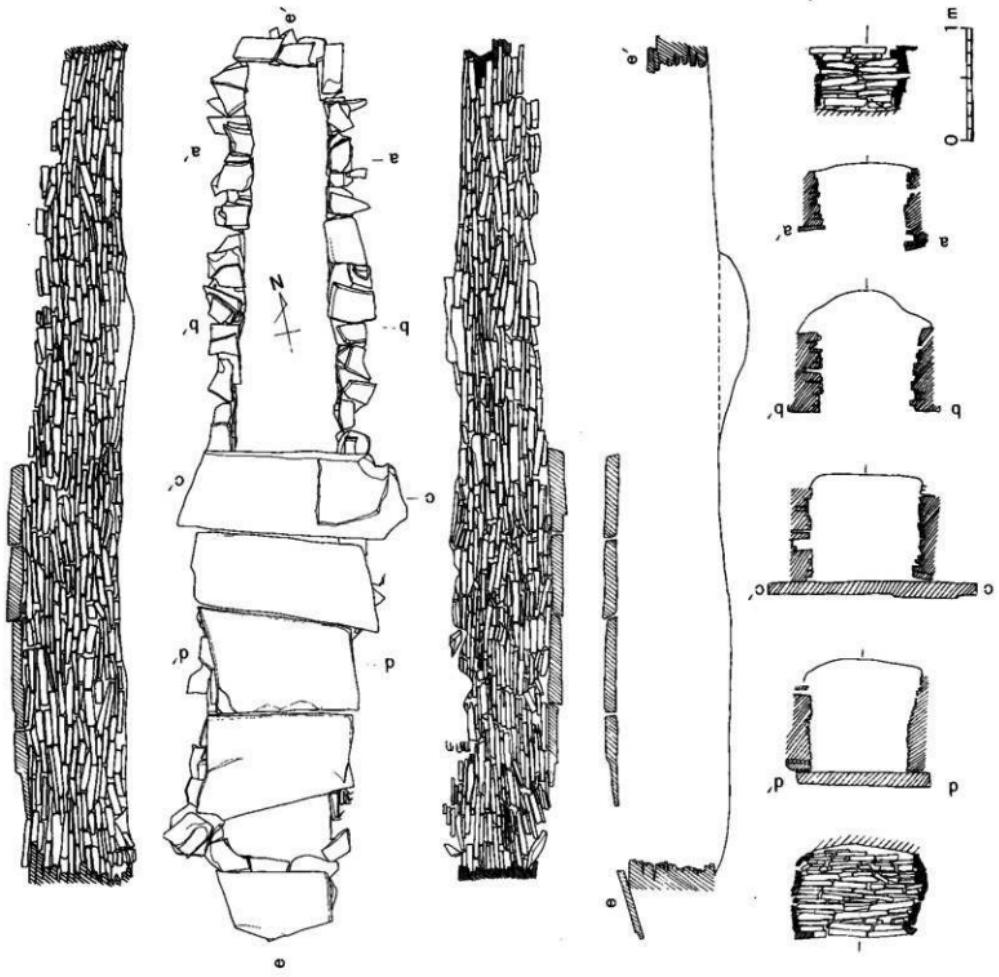
は、上として古墳時代の遺物について石劍、銅劍、銀劍、金劍、鉛劍などとよんでいる。

〈鍔形石〉

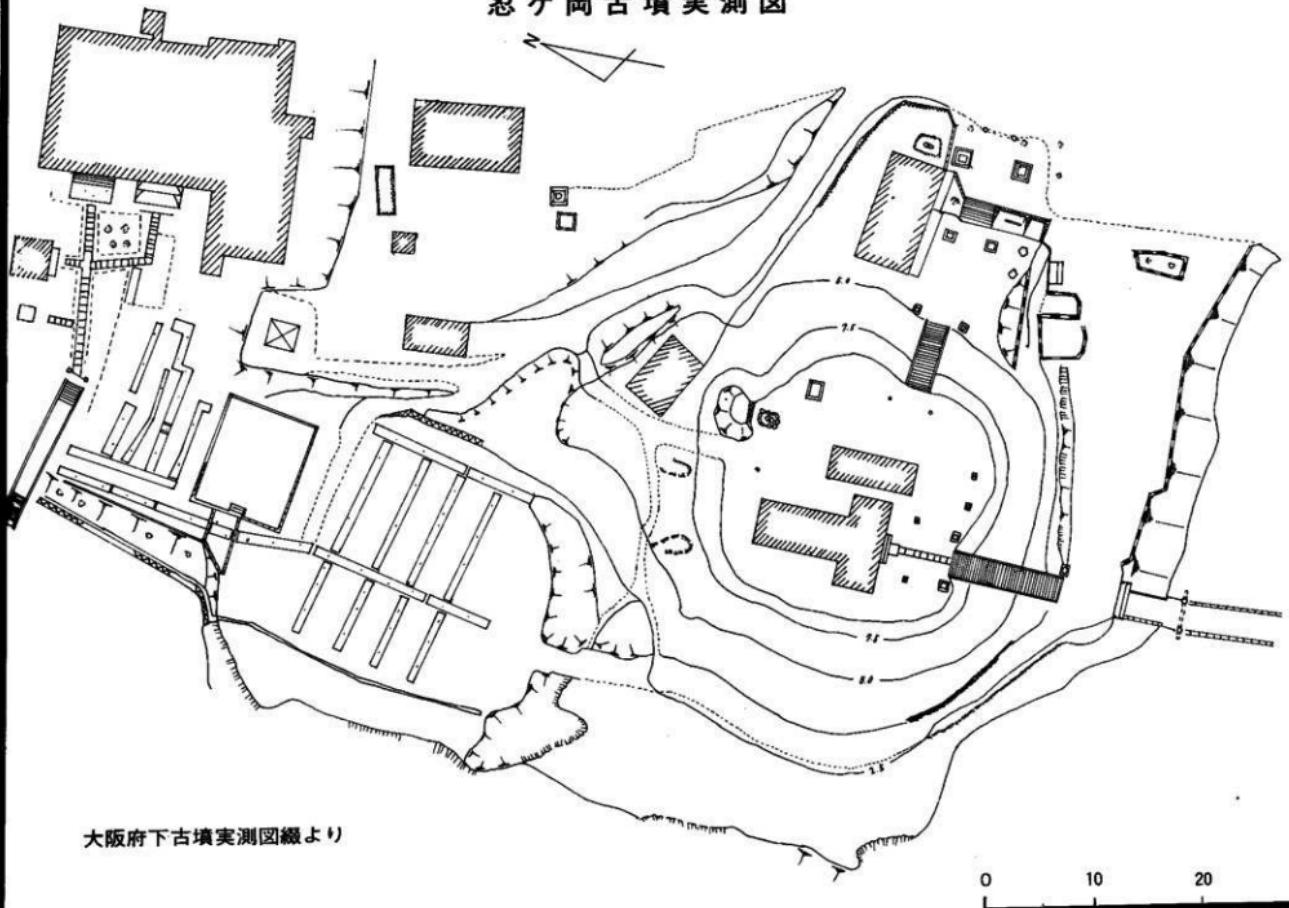
古墳時代の碧玉製の輪輪の一類。

形が歎の刃に似ているところから、江戸時代の学者によって鍔形石とか、歎の歎石とか呼ばれ、今日もそのまま歎形石の名で呼ばれている。

忍ヶ岡古墳石室実測図

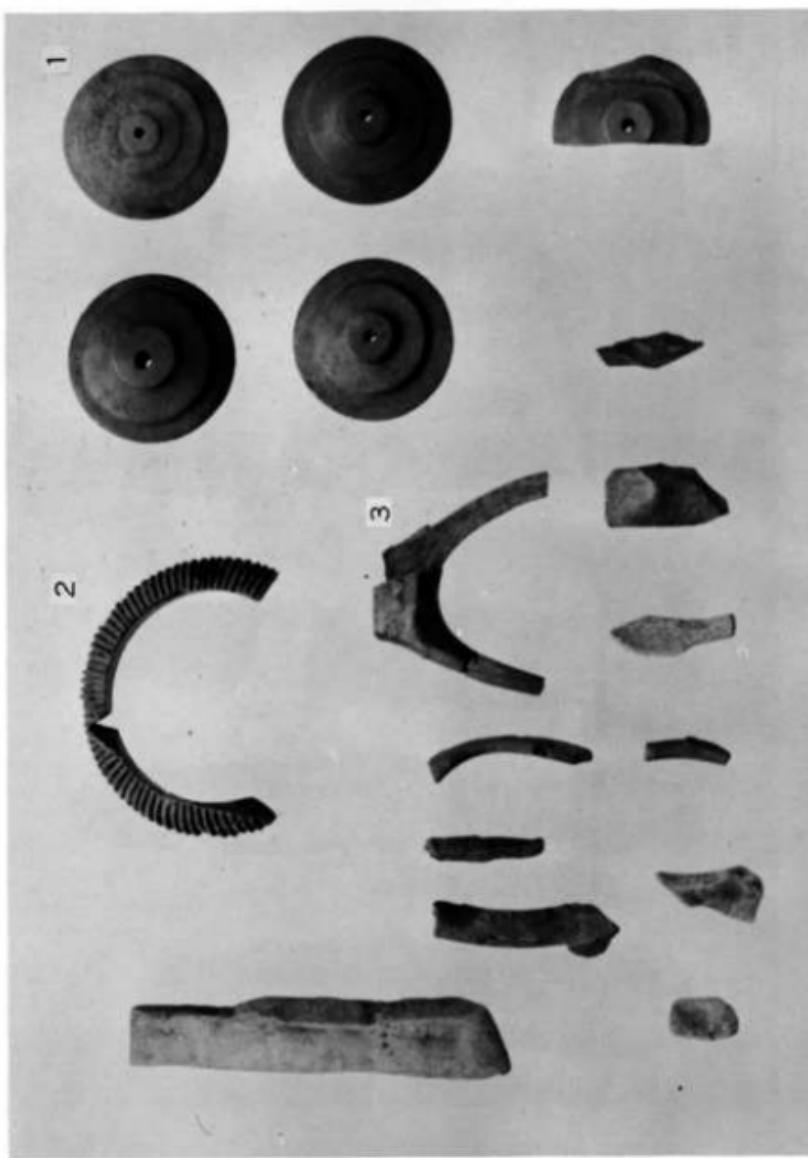


忍ヶ岡古墳実測図



大阪府下古墳実測図綴より

0 10 20 30m

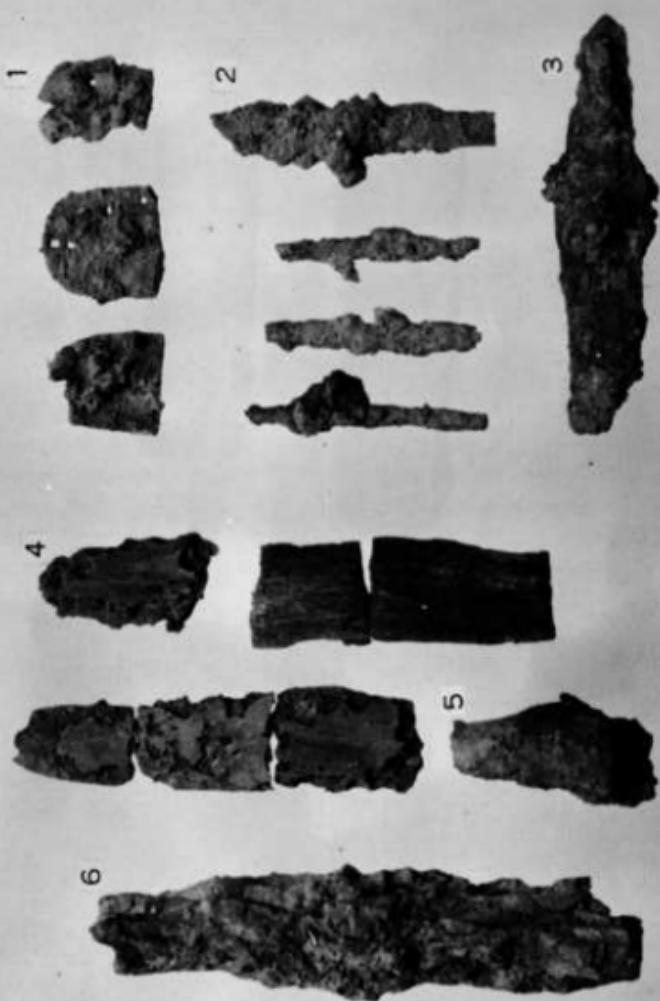


忍ケ岡古墳出土の遺物 (一)

1 砂鍋車

2 石 鍋

3 磨形石



忍ケ岡古墳出土の遺物(一)

1 小札 2 小刀 3 刀子 4 刀身 5 鋒 6 大刀身



2



あとがき

本書の作成にあたり、京都大学考古学研究室および、都出比呂志氏の協力を得たほか、桜井敬夫氏の指導を得た。記して感謝の意をあらわしたい。

作成スタッフ

監修 漢川芳則

執筆 宇治田和生・桑原武志

実測 宇治田和生・三宅俊隆

馬場次男・大野陽明

写真 漢川芳則・宇治田和生

企画 井上博司

発行 1974年4月1日

発行者 四條畷市教育委員会

印刷所 田中印刷 K.K.